京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

News Letter

Graduate School of Education

44

2022.6

教育学研究科HPリニューアル（2022.7）

巻頭言 2
楠見　孝　研究科長

名誉教授から 3
鈴木　晶子　名誉教授
西平　直　名誉教授
岡野　憲一郎　名誉教授

研究ノート 4
［教員から］奥村　好美　教育・人間科学講座　准教授
［院生から］櫃割　仁平　博士後期課程2回生
［社会人院生から］田淵　知紗　修士課程2回生
［留学生から］温　秋穎　博士後期課程2回生

活動報告 6
［附属臨床教育実践研究センターから］
田中　康裕　附属臨床教育実践研究センター長
［教育実践コラボレーション・センターから］
石井　英真　教育・人間科学講座　准教授
［グローバル教育展開オフィスから］
高山　敬太　グローバル教育展開オフィス　室長

トピックス 7
「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト
野村　理朗　教育認知心理学講座　准教授

在外研究報告 8
RAPPLEYE,Jeremy　教育・人間科学講座　准教授

国際交流事業 9
齊藤　智　教育認知心理学講座　教授

事務室から 9
中村　敦朝　教務掛長

若手研究者出版助成事業 10

諸記録 11
・主な出来事　（2021.11.1 ～ 2022.3.31）
・入試結果　2022（令和4）年度
・学位授与件数　2021（令和3）年度
・教育職員免許状取得状況　2021（令和3）年度
・外部資金受入れ（2021.10.1 ～ 2022.3.31）
・科学研究費補助金　2022（令和4）年度
・教員寄贈図書リスト　2021（令和3）年度
・人事異動　（2021.11.1 ～ 2022.4.30）

諸報 15
・新任教員・事務職員紹介
・名誉教授訃報

教育学研究科・教育学部基金 16

京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

巻頭言

なつかしい未来へ向けて：コロナ禍における大学生活

教育学研究科長・学部長　楠見　孝

新型コロナウイルスの感染流行のもとで、3年目の新年度を迎えることになりました。

新型コロナウイルス感染のリスクは下がってはいませんが、大学は、学生の皆さんの協力のもと、感染対策を十分にとりながら、対面中心の授業を進めています。マスクを着用し、会食などの密な交流ができない大学生活は、不自由な毎日と思います。しかし、感染症の拡大はいずれ終息して、こうした大変な日々をなつかしく思える日がくるために、今できることは何かをここでは考えることにします。

なつかしさは、過去に頻繁に経験したことを、時間を経てから思い出す時に伴う、ポジティブ感情（楽しさ、幸福など）とネガティブ感情（感傷、後悔など）が入りまじった感情です。とくに、時代の変わり目や社会の変化が大きい時に、昔の日々をなつかしく思い出すことが起こります。たとえば、私たちは、コロナ以前のマスクのいらない毎日をなつかしく思い出すことがあります。私が実施した2022年3月の全国調査（16-88歳の924人対象）では、6割の人がコロナ流行前のことをなつかしく感じていました。

なつかしい記憶には、良い働き（機能）が複数あります。ここでは、4つの働きを紹介して、未来において、皆さんが大学生活をなつかしく思い出すために、今できることは何かを考えたいと思います。

なつかしさの第一の機能は、過去を共に過ごした仲間との社会的絆を思い起こして強めることです。たとえば、小学校時代のことを思い出すと、その時に一緒に過ごしたクラスメイトとの友情やお世話になった人とのつながりを思い起こし、他者との絆の大切さを再認識することになります。そのためにも、学生の皆さんには、人とのネットワークを作ってほしいと思います。教育学部は、京大で一番少人数の学部です。それは、学生同士そして教員とすぐに知り合いになれる強みだと考えています。さらに、他学部の異なる専門の人たちとのつながりを作ってください。これらの人との親密な関係は、将来にわたる大きな財産になると思います。

なつかしさの第二の機能は、人生を意味づけることです。私たちは、いま新型コロナやウクライナでの戦争など、健康、命、教育に対する危機的な状況に直面しています。皆さんは、こうした問題を日々考えつつ、教育学や心理学を学んでいると思います。こうした問題を、個人でそして人々とともに考え、乗り越えた経験は、人生において、より大きな危機に立ち向かうための重要な経験になると考えます。

なつかしさの第三の機能は、過去から現在への自己の時間的連続性を意識することです。皆さんは、高校から大学に進学して、自分の考え方や行動が大きく変わった部分があると思います。一方で、昔のことを思い出すと、いまの自分は、昔の自分や過去とつながっていて、自分の大切な部分は時間がたっても変わらないことに気づくと思います。私は、皆さんが大学時代に様々な経験を積み重ねて、変わりたい部分を変えることによって、成長してほしいと考えています。それとともに、変えたくない部分を大事にして、人生という物語の主人公として、自分の核となるものの連続性を意識してほしいと思っています。

なつかしさの第四の機能は、自己の明確化です。これは、昔から現在までのことを思い出すことによって、第三でも述べた自分にとって大切な核となるものを見出すことにつながります。自分自身のことは知っているようで、自分がどういう人間であるかの確信を持っている人は少ないと思います。皆さんには、教育学や心理学を学ぶ中で、自己を分析する理論や手法を学びつつ、第一に述べた人との交流の中で、自分の良い点（持ち味）に気づいてほしいと思います。

以上述べてきたなつかしい記憶を思い出すことの4つの機能は、人生に活力や幸福感をもたらすことになります。皆さんが、コロナ禍において寂しい時、先行きが不安な時、自信を失った時などには、昔よく聴いた音楽や読んだ本に再び接したり、思い出の写真を見てください。それらは、あなたを楽しかった過去へのメンタルタイムトラベル（時間旅行）に導くことで、人との絆を思い起こし、人生における自己の連続性と人生の意味に気づくことにつながると考えます。そして、未来において、京大でのなつかしい日々を思い起こすことが、よりよい人生を切り拓く力となるようにと願っています。

名誉教授から

感謝の裡に

鈴木　晶子

このたび3月末日をもちまして、京都大学大学院教育学研究科を定年退職いたしました。1997年4月に着任してから25年間にわたり、無事勤務することができましたのも、皆様がたのご芳情の賜物と厚く御礼申し上げます。振り返ると、研究心あふれる同僚や学生さんたちに囲まれ議論するなかで思いもしなかったアイデアが溢れ出す瞬間に数多く恵まれ、研究と教育とが深く連動した京都大学ならではの学風は、誠に得難いものであったと思います。ただ、この3年間は、コロナ・パンデミックの影響により、日常なかなか自由にお目にかかりお話する機会が途絶えてしまったことは残念でなりません。

また、教務をはじめそのほか様々な業務に向き合うなかで、事務部の方々からのご助言の数々は、大型の研究プロジェクトや他部局との連携プロジェクトなどを進めていく際に、大変心強く、励みとなりました。ご厚情に改めて心より御礼申し上げます。研究倫理、コンプライアンスの重要性がますます指摘されるなか、気軽に色々と相談に乗っていただける環境に恵まれていたことは、実に有難いことであったと思っております。

この４月からは、京都大学学際融合教育研究推進センター・人工知能研究ユニット・特任教授として、また、2016年から兼務させていただいておりました理化学研究所革新知能統合研究センターの客員主管研究員として、主に、人工知能をはじめとするデジタル・トランスフォーメンションの倫理・法・社会的課題に引き続き取り組んでまいります。文明の転換期や社会の動乱期には、いつも教育の課題がクローズアップされます。研究プロジェクトに関わり、皆様方の専門的知見を仰ぐ必要がでてくるかと思います。何卒、今後ともご好誼を賜りますようお願い申し上げ、退職のご挨拶とさせていただきます。

教育学研究科はもちろん、皆様の一層のご発展を祈念申し上げます。

何を捨て、何を残すか

西平　直

研究室の引越は、想像以上に、大変だった。15年もお世話になったのだから、覚悟はしていたのだが、それでも予想を遥かに超えていた。雪だるま式に増えてきた本や資料を、半分以下にする。ということは、選別しなければならない。何を手放し、何を残すか。自分はこれから何をしてゆくのか。何度も手を止め、立ち止まった。

「人生100年時代」という。もし本当ならば、まだ先がある。しかしいつ終わりが来るのか分からない。遺品は遺族を悩ませる。とりわけ書籍は厄介である。ならば今こそ断捨離。そう思うのだが、でも待てよ。いつまた使うかもしれない。手放したら後悔しないか。そうやって、一冊ごとに迷っているのだから、まるで作業が進まなかった。

さらに、私を悩ませたのは、古い昔のダンボールである。15年前東京から引越してきた時のダンボールは一度も開けていなかった。昔の時間がそのまま封印されている。開けた途端、一瞬にして、その時の感覚が蘇ってきた。しかも中身はさらに昔の「記念品」である。院生時代の様々な「不採用通知」が出てくる。まるで先が見えなかったあの頃。あるいは、中学校の通知表も出てくる。その出来の悪さには笑ってしまったのだが（理科20点！）、これも、やはり、捨てられない。

しかしそれでは困る。そう思って必死に自分に言い聞かせた。15年間一度も見なくても、何も困らなかった。思い出すこともなかった。ならば、ここで捨てても、何も困らない。

とは思うのだが、でも、待てよ。せっかくここまで「生き延びてきた」記念品ではないか。いずれ歳を重ねたら、もっと愛おしくなる。今よりさらに味わい深くなる。そう思うと、ますます名残惜しくなる。そして、そのまま、そっと、誰にも見つからないように、元に戻す。何を残し、何を捨てるか。これから何を大切に思うのか。

名誉教授の称号を戴いて

岡野　憲一郎

私は本年3月末日で京都大学教育学研究科の教授の任期を終えたが、やはり8年間過ごした京大との関係がこれで切れてしまうのかと思うととても残念である。しかし幸いなことに退職と同時に京大の名誉教授の称号をいただくことになった。まことにありがたいことである。しかし同時に改めて名誉教授とはどのような立場なのかを考えてもさっぱりわからなかった。そうした折、大学から名誉教授の証というカードを交付された。磁気ストライプがついていて何かを読み取ってくれるようである。ただしこれによりどのような「特典」があるのかについてはよく分からない。このカードで京大の図書館に入館できるのであれば有り難いことではあるが、あいにく東京在住となる身では、京都までそのために出向くということはあまり考えられないのだ。

しかしそれでも私は一生京都大学と縁を持てることになった。京大「所属」とは言えないかも知れない。しかし私は「京大の名誉教授である」と死ぬまで言い続けることが出来る。ただ身が引き締まる思いでもある。私が今後どのような不始末を働いても、京大名誉教授という肩書を持つということは、おそらく京大に多大なご迷惑をかけることになる。「東京都在住の男性、コンビニでのおにぎりの万引きが発覚する」は誰も興味を示さず、ニュースネタにさえならないだろうが、「京大名誉教授、スーパーでおにぎりを万引きする」はネットの記事になってしまうかもしれないからだ。

こんなことを書いていると「京大名誉教授らしからぬ」文章と言われそうなのでこのあたりにしておくが、正直な話、私はこの名誉教授という称号が嬉しいのである。私が過ごした8年間が幻ではないことを示してくれる記念品のようなものなのだ。たとえ京大図書館に入館すること以外の「特典」しか伴っていなくとも、私にとって名誉であり、一生の宝物である。私はカードが発行されてもすぐ失くしてしまう癖があるが、この白に青文字の「名誉教授の証」は決してなくさないだろう。

京都大学の教職員の皆様、そして学生の皆様、長い間有難うございました。そしてこれからもよろしくお願いいたします。

教員から

1冊の本との出会いから

教育・人間科学講座
准教授
奥村 好美

かつて学部3回生だった頃、親しい友人がオランダへ留学することになった。せっかくなので、私も彼女を訪ねてオランダ旅行へ行くことにした。出国の数日前、たまたま寄った書店で、リヒテルズ直子さんの『オランダの教育』という本を見つけた。もうすぐオランダに旅行に行くのだから読んでみようかな、となんとなくその本を手に取った。

その本には、オランダでは憲法で「教育の自由」が保障されていること、日本と比べ多様な学校が公教育の枠組みで運営されていること、保護者・子どもは近隣の複数の学校から合う学校を選び通うことなどが具体的なエピソードとともに書かれていた。一読して、すっかりオランダの教育に魅了された。

その後、早速、学部の卒業論文で、オランダの教育をテーマに取り組みたいと考えた。しかしながら、そのためにはオランダ語の文献を読む必要があることを指導教員の先生からご助言いただき、その時には断念した。それでも、どうしてもオランダへの想いは消えなかった。修士に入ってから、学生のうちにどうしてもオランダに学びに行きたいと感じた。心に風が吹いたようだった。幸い、交換留学制度を使ってユトレヒト大学へ留学することができた。初めてユトレヒトに着いた時、もう夜の21〜22時頃だったと思うが、街灯が灯る街並みをバスから眺めながら「あぁ、やっと帰ってきた」と安堵したことを覚えている。

オランダについて調べるにつれ、多様な学校教育を尊重しながら、いかに公教育としての質を保証できるのかという問いを持った。結局、その問いに基づき、博士論文を執筆した。この問いは今も自分の研究を支えており、考え続けている問いである。振り返ってみれば、1冊の本との出会いが最初のきっかけであった。もちろん多くの方に支えていただいたからこそ今もオランダの研究を続けられているわけだが、本を通じた出会いが人生を変えることがあることをしみじみ感じている。

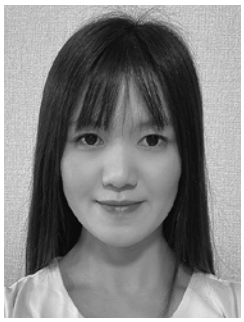
院生から

17文字の小さな世界を通して、「美」の核に触れたい

教育認知心理学講座
博士後期課程2回生
櫃割 仁平

昨年ご逝去された京都大学元総長の長尾真先生は、ある年の京大入学式で「真善美」という言葉を紹介し、その中でも「美」について「人格陶冶の究極の目標は美の感覚を身につけること」と述べられました。大学生活、ひいては人生を通して、この感覚を磨いていって欲しいと伝えられたわけです。私は、世界最短の詩俳句を用いて、「美」について研究しています。元々俳句に馴染みがあったわけではなく、大学院で縁があって取り組んでいます。なぜ俳句?と思われるかもしれませんが、俳句が美を解明する上でうってつけである3つの理由を紹介します。1つは、俳句には変数が少ないことが挙げられます。例えば、音楽の美を研究したい時、美に影響を与える変数として、メロディー、テンポ、音色、歌詞、etc. という風にいくらでも挙げられます。俳句にももちろん変数は多くあるのですが、5・7・5という形、有季語というルールが明確で他の芸術に比べて研究の俎上に上げやすいと考えています。2つ目に、俳句は日本発祥であり、日本特有の美、日本人特有の美意識が反映されています。修士の研究では、ドイツとの文化比較研究を行いましたが、やはり、美の感じ方は異なっていました。日本には、わびさび、粋、幽玄などの興味深い美に関する概念が多くあり、俳句でそれらを明らかにできればと考えています。3つ目に、その究極の短さによって美の核心を捉えられるのではないかということがあります。物理の世界では、原子、原子核、核子、そしてクォークと、小さい世界を探索することによって、様々な物質や現象を知ろうとしてきました。同様に、芸術の世界でもその小さい世界の最たる例が俳句だとしたら、美の核に迫れるような気がしてきませんか。先述した長尾先生は、美とは何かを説明することは簡単ではない、とも仰っていて、この解明の道筋はまだまだ険しそうですが、俳句という武器と共に研究を続けていきたいと思います。

社会人院生から　「今，自分が見ている風景」を捉え直す



教育方法学講座
修士課程2回生
田淵　知紗

朝，家を出ると，近所の小学生がちょうど登校をしている。朝の登校風景には，“学校に対する子どもたちの正直な思い”が表れている。足取り，表情，会話，姿勢…いろいろなところに。そのことに気付いたのは，産休・育休を経て復帰し，それまでよりも出勤時間を少し遅らせるようになったときだった。

出勤時間を少し遅らせたことにより，学校に向かう道中で，勤務校の子どもたちと一緒になる。駅から学校に向かう道々，思わず駆け出し，でも走ってはいけないと速まる歩調をスキップに抑えながら，笑顔を弾けさせている子どもたちがいた。子どもたちは，こんなにもワクワク感を全身に表しながら登校していたのかと驚いた。わたしはそれまで登下校と言えば，「道の端に寄って，ちゃんと歩いてきたか」ばかりを尋ねてきた気がする。

思い返せば，自分は小学生時代，通学路の道にいるミミズを毎日数えながら，のんびりのんびり登校する子どもだった。早く学校に行くことよりも，ミミズを数えて歩く方に魅力を感じていた。アンケート等で，「学校に行きたくないか」と尋ねられれば，当時のわたしは「いいえ」と答えていただろう。学校が嫌だと明確に感じていたわけではなかったからだ。しかし，そこには，数値化できない子どもなりの鬱積した思いもあった。

今，大学院で学んでいることは，このような数値化できない“子どもたちたちの百人百態”とそこに影響を与えている様々な教育側面を分析的に捉える視角を得ることだ。そして，自らの視角を客観的に把握することだ。得られる視角を増やしていくことで，百態示すすべての子どもたちを自らの対象に据える教育方法学という学問は，とても面白い。

日々，先人の研究者・実践者による理論知，方法知の分厚さに圧倒されながらも，自らもそのような理論生成ができる実践者になりたいと強く感じている。

留学生から　国境を越えた言葉を大切に

教育社会学講座
博士後期課程2回生
温　秋穎

外国語のことを真剣に考えるようになったのは、大学院に進学する3年前、武漢大学の歴史学院で恩師・王建新先生による日本語の授業を初めて受けたときのことでした。アナウンサーを思わせるぐらい流暢な日本語を操る先生が、ユーモラスなスタイルで教えているのを聞いた私は、思わず「日本の方ではないか」と戸惑いました。言葉の世界への扉がここから開きます。母語ではない外国語を通して相手の気持ちを分かる方法は、本当にないのでしょうか。「日本語を中国語に訳して理解するのではなく、言葉のもともとの文脈から考えよう」、「話しの流れを予測するために助動詞の意味に対するセンスを磨こう」などと、先生にはさまざまなことを教わりました。

このとき日本語を学んだ経験は、いまの研究の原点ともいうべきものでしょう。ただ、今の研究対象として取り扱っている言葉は、日本にとっての「他者の言葉」としての中国語です。日中関係が複雑な様相を呈した近現代において、ラジオ放送の「中国語講座」や中国語学習雑誌といった大衆向けの中国語学習の教材が、どのような中国語のイメージと中国そのものの像を学習者に想像させたのか。この問題に関心を持ち、本研究科ではメディア史や文化政策学、思想史の分野からも多くの知的刺激を受けながら、研究を進めてきました。現段階での研究計画では、教える側と学ぶ側が相互に影響しあう中国語の「受容史」をまず俯瞰していきたいと考えています。史資料の発掘と読解が主な研究手法です。大量の資料の前に躓くことも少なくありませんが、史資料で語られた「事実」に驚きを覚えることもまた研究生活の日課となっており、そのなかで、国境を越えた言葉が個人と個人を結び、隔たりなく人々が自由に話し合う光景を常に心に思い浮かべます。

コロナ禍でしばらく帰国できなかった私は、母国語から遠ざけさせられているように感じます。ただ、日本語を使う研究と生活にはとくに不自由を感じなくなりました。国境を越えた言葉と学びの経験を大切にし、新しい言葉のありかたを探りながら、自分の研究を一歩ずつ進めたいと思います。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター長
田中 康裕

当センターは、一般市民に開かれた臨床実践としての、心理教育相談室での大学院生や教員による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊など、多岐にわたる教育・実践・研究活動を行っています。

昨年度は一昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大の影響により、「リカレント教育講座」、「公開講座」は残念ながらいずれも開催中止となりました。今後の感染状況を注視しながら、ということにはなりますが、今年度の「リカレント教育講座」は、「『心の教育』を考える―思春期とSNS―」をテーマとして、7月24日（日）に、また、11月20日（日）には、サイモンフレイザー大学のロジャー・フリー先生をお迎えし、「社会的精神分析に向けて」と題した公開講座を開催する予定です。

また、東日本大震災に関連して関西に避難・移住されてきた子育て世帯を対象として、継続的に支援活動を行っている「こころの支援室」も、この2年間はコロナ禍の影響を受けて企画の開催を見合わせざるを得ませんでした。震災から10年以上が経過し、参加世帯の状況も個別化してきておりますが、今後もこれまでのつながりを大切にしながら、ニーズに合わせた支援活動のあり方を引き続き模索してまいります。

教育実践コラボレーション・センターから

京都市立高倉小学校との共同授業研究

教育・人間科学講座　准教授
石井 英真

学校教育改善ユニットの取り組みの一つとして、京都市立高倉小学校と私たち教育方法学研究室との共同研究（プロジェクトTK）が今年度もスタートした。2003年、私がD1の終わりから始まった共同授業研究の取り組みも、約20年にわたって実施されてきた。当時、大学院生が学校現場に入ることはまれであって、授業を観察し記録を取り、子どもたちや授業の様子を授業者の先生に返していくなどして、先生方との信頼関係を作っていくところから、自分たちができることを自問しながらの展開であった。そうした試行錯誤の積み重ねの上に今があるし、私の年齢の半分近く続けてきたと思うと、その歴史を改めて実感する。今年度もパフォーマンス課題（リアルな文脈で知識・技能を総合的に使いこなすことを求める評価課題）の開発等を軸にした活動を行っていく予定だが、今年度は、新たに着任された奥村好美准教授も加わり、連休明けの高倉小学校での校内研修会は、三人の教員で講話やワークショップ等を行った。小学校側も常に異動があり、若い先生方が増えていくし、研究室側も特に大学院生は入れ替わっていく。その都度その都度、最初から確認していくことも多いが、確実に積み重なっているものはあるし、人の入れ替わりがあり、特に若い人たちが次々と入って来るからこそ、それぞれの組織や取り組みに新陳代謝や刷新も生まれ得る。前例踏襲でルーティン化や硬直化することなく、新しい感性や考え方を生かして、さらなる発展が生まれることを期待しているし、そこから自分自身が学べることを楽しみにしている。

グローバル教育展開オフィスから

ダイバシティー時代の「日本型教育」の行方

グローバル教育展開オフィス　室長
高山 敬太

過去二年間、当オフィスでは「日本型教育」に焦点を当てて、国内外の研究者を招いてウェビナーシリーズを企画してきました。2020年度は『越境する日本型教育：歴史的・多角的理解に向けて』というテーマで、過去100年間に様々な形で海を渡った教育実践を検証し、今日の日本型教育の海外展開を歴史的文脈に位置付けました。2021年度のウェビナーシリーズ『「日本型教育」を再考する：東アジアとの対話を通じて』では、東アジアの教育研究者の視線を通じて、英米との対比からのみ語られがちであった「日本型教育」の特徴を東アジアとの対比から浮かび上がらせました。どちらのウェビナーシリーズにおいても、「過去」や「東アジア」を一つの参照点として位置づけて、そこから「日本型」を見つめ直す―相対化する―ことを目的としていました。

本年度のウェビナーシリーズ『ダイバシティー時代の「日本型教育」の行方』でも、「日本型」を相対化する作業を継続します。今回の参照点は、「日本型教育」とは様々な形で亀裂を経験している人々、すなわち国内の「ダイバシティー」の存在です。日本型教育は海外からの関心に応える形で、積極的に海外展開しようとする動きがあることは前回のニュースレターで触れました。こうした場合、日本型教育の優れた側面のみが前景化される傾向があります。ですが、国内の議論に目を向けると、ダイバシティーへの対応という点において多くの課題が指摘されています。日本型教育は全人教育的性格が特徴であり、規範意識や協調性を育むと国際的にも評価されていますが、それは同時に子どもたちの多様性を抑圧する同調圧力にも転化します。事実、人種、民族、言語、能力、セクシュアリティーにまつわる「差異」を有する子どもたちが、日本の学校教育の「壁」に直面していることは、多くの研究によって明らかにされています。

こうした他者化された子どもたちの経験を通じて日本型教育を眺めるとき、どのような特徴と課題が浮かび上がるのでしょうか。そもそも日本型教育の「強み」とされるものを活かしつつ、多様な子どもたちの存在を肯定する教育は可能なのでしょうか。また、英米圏の多文化教育の実践とは異なる、日本の文脈に即した「日本型」ダイバシティー教育の理論と実践があるとすれば、それはどのようなものなのでしょうか。『ダイバシティー時代の「日本型教育」の行方』では、国内外の研究者や実務家を招いて、これら一連の問いへの考察を深める契機とします。第一回目のウェビナーは6月17日に予定されています。埼玉大学の渡辺大輔先生をお招きして『「性の多様性」をめぐる日本の学校教育の課題』についてお話を頂きます。皆様のご参加をお待ち申し上げております。

トピックス

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト

教育認知心理学講座　准教授
野村 理朗

肉体を失った後に、私たちはどこへ行くのか。あるいは身心を整え、平安を得るためにはどうしたらよいのか。そもそも平安とはなにか。私たちをとりまくこの社会をよりよい方向へと導くにはどうしたらよいのか。そうした問いを抱き想いを巡らせながら心理学を専攻していた大学院生の頃は、キリスト教の伝道者となる道筋も描いていました。聖書には「全世界に行って、福音を宣べ伝えよ（マルコ16:5）」とあります。それに従い、情熱の一部を国内宣教へと傾けました。その道中の多くはバイクに跨り、各地を巡ります。風をじかに感じ、転倒のリスクを孕む車体とともに、自然界に包まれ、ときにそれらと一体化する。日本のキリスト者は、国内全人口の1%弱程度とされています。その割合が増加してゆく兆しにない。やがては私自身、“キリスト教”にたいする違和感や不足を感じるようになりました。この“キリスト教”の枠組みは、日本の風土や心性に沿ったものとなっているのだろうか？

この問いが原体験の一つとなり、今日の研究課題を生み出してゆく原動力となっているように感じます。

雄大な自然を前にすると、圧倒され、ときには自他を分かつものがなくなる。その周縁には縁はなく、どこまでも広がりのあるように感じる。こうした体験を美学や修辞学では「崇高体験」といいます。そこには自己超越的感情（self-transcendence emotions）が伴うともいわれています。自己超越には対象を取り込み・包摂してゆく過程がありますが、むしろ私が自己超越感情において注目しているのは、自己超越にとどまらない作用です。そこには若き日の私の問いにたいする重要なヒントが潜んでいると考えるためです。ところが、この仮説を構築検証してゆくための科学的知見が不足しています。ほとんどないといっても過言ではありません。そこで、心理学や脳科学で語られてきた構成概念を梃子とし、自己超越的感情やマインドフルネス、身体性やゾーン体験といった概念を手がかりとしつつ、東洋思想の膨大なコンテクストの力を享受し、それらを融合しつつ、フロンティアを開拓する道中にあります。皆さまのご支援をよろしくお願いします。

Hello! From Stanford

教育・人間科学講座　准教授
RAPPLEYE,Jeremy

From August 2021 – March 2022, I was lucky enough to take sabbatical leave. During this time, I worked with renowned cultural psychologist Hazel Markus at Stanford University. Our research seeks to open a constructive dialogue between cultural psychology and education, as a way of challenging the narrowing of educational diversity inherent in the OECD's PISA studies. In many senses, the OECD's work is the latest in a long line of Western-led attempts to "develop" the rest of the World according to its own standards of "civilization". Several years ago, when I visited the Stanford campus, any sort of critical stance towards this was not apparent: most Stanford scholars, especially in education, were talking about the consensual emergence of a common World Culture, the unique ingenuity of the West, and 'The End of History' (John Meyer, Niall Ferguson, and Francis Fukuyama, respectively).

So it was fascinating for me to note that the Stanford campus had changed. Right on Meyer Green – the very center of campus and just next to the School of Education - was a new art installation by Chinese artist Xu Zhen entitled Hello!, as pictured above. The sculpture represents an ancient Greek Corinthian column, the very symbol of Western civilization. But it is coiled like a cobra, ready to strike; its ominous size bearing down on the onlooker. Hello! captures the dual meanings inherent in Western civilization: something carrying the heavy-load of the highest ideals for some; a threatening, attacking beast for Others. Its inclusion on campus is undoubtedly a response to the post-colonial and de-colonial thought (fueled by American anxiety about the rise of China), the realization that the past 500 years have not been an advance of Hegelian Geist, leading to greater freedom for all, but instead left the modern world with an ambivalent legacy.

I find that in Japan, particularly in educational research, there is hesitancy to take up such a critical stance towards Western modernity. Such affective hues of resentment, militancy, and suspicion, I am constantly warned, may spiral out of control into reactionary nationalism and thus block the path to mutual learning. This is where Hello! becomes all the more fascinating: right at the center of the column there is an empty space – a nothingness. Xu Zhen, in describing the work, cites Nietzsche's famous line about being transformed by staring into the abyss. This seems to suggest that – in the end – the encounter of civilizations (plural!) must be constructed within a core of nothingness: a willingness to move beyond foundational premises, self-negate, and thus open one's self to be filled by the Other. In fact, just before leaving for Stanford, I published a piece together with recently retired GSE professor Yano Satoji entitled Global Citizens, cosmopolitanism, and radical relationality: towards dialogue with the Kyoto School? (2021), where we suggested a similar path to global encounters. Hello! is – at least in my interpretation - an artistic representation of what we were seeking to convey in our piece.

I was pleased to find then that here, even at Stanford, there is recognition of the need to move beyond Western frameworks, the American monologue of World Culture, and carry out a long-overdue dialogue atop nothingness. I note that Markus's notion of "interdependent self" is ontologically aligned with this notion as well, hence our ability to collaborate across disciplinary divides. Kyoto University – as crossroads of dialogue for 125 years - has something profound to add to this global discussion, but not if we don't leave Kyoto sometimes and say Hello! to the wider World.

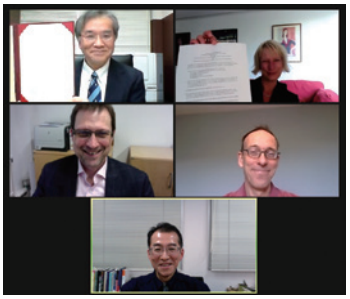
国際交流事業

ランカスター大学心理学部との学術交流協定更新

教育認知心理学講座　教授
齊藤　智

教育学研究科とランカスター大学心理学部は、2006年に学術交流協定を締結し、その後、2011年と2016年に、協定内容の見直しと更新をおこなってきました。この15年間、2つの組織は、教員と大学院生の相互訪問、シンポジウムやワークショップ、講演会の開催など、様々な活動によって学術交流を深め、その共同研究からは、すでに数編の論文が国際学術誌に報告されています。この交流に関わってきた大学院生の多くが、現在、日英の各地で大学教員や研究者として活躍していることも特筆に値します。こうした成果をふまえ、さらに5年間の継続した学術交流を推進するため、2021年11月11日に同協定を再度更新いたしました。学術交流協定の調印式は、ランカスター大学から、科学技術学域の学域長であるPeter Atkinson教授（写真中段左）と心理学部の学部長Kate Cain教授（写真上段右）、学術交流を導いてきた同学部のJohn Towse教授（写真中段右）が、京都大学からは、楠見孝教育学研究科長（写真上段左）と齊藤（写真下段）が出席し、執り行われました。これまでの交流を振り返るとともに、今後の交流活動を展望するよい機会となりました。

直近の交流活動は、少し遡る2019年3月末に、日英大和基金の支援を受けて京都大学で開催された国際ワークショップ"Muti-person perspectives in psychological science"となります（詳しくは、http://wp.lancs.ac.uk/m3ps/　をご覧ください）。2日間に亘るこのイベントの初日には、「Shared cognition and the science of collaboration」、2日目には「Social cognition and the influence of others」というテーマのもと、研究発表と濃厚なディスカッションが行われました。話題を提供してくださった森口佑介先生（京都大学）と前原由喜夫先生（長崎大学）のお二人は、大学院生時代にランカスター大学との交流に積極的に関わってくださっていました。今回のワークショップに参加した大学院生の中からも、国際レベルで研究活動を牽引する人たちが現れることを願いつつ、今後もランカスター大学との学術交流を推進していきたいと考えております。



事務室から

学びと日本について

教務掛長
中村 敦朝

教育学研究科の職員のとして働くことになって、「教育」という言葉について少し考えました。教育学研究科においての「教育」というのは、学問としての教育であって、その点は、私自身は全くの素人で未知の世界です。一方で、一般的な意味での教育というのは、教育機関で働く教職員は仕事として、全員教育に関わっていますし、教育を個人のレベルから見た「学び」という意味では、職業や年齢に関係なく、生涯教育という言葉のとおり、一生教育と無縁な人はいません。そこで、最近の個人的な学びについて少し書いてみたいと思います。

約3年前に年号が変わったことをきっかけにして、日本古来の神社の成り立ちについて興味を持つようになりました。当時は恥ずかしながら、神社とお寺の違いすらよくわかっていませんでした。いろいろ興味を持って調べたりすることで、神社には祭神がいること、祭りやしめ縄には意味と物語があること、そして、神社とお寺には、それぞれの成り立ちの歴史があり、また神仏習合の歴史、神仏分離の歴史等があること、日本には古事記という日本神話があり、それは、昔はより身近な存在であったこと等が、少しだけ理解できるようになりました。

八坂神社の祭神が、須佐之男命であるというのも最近知ったことですが、小学生の頃に読んだ、手塚治虫の「火の鳥」という漫画に、似た名前の登場人物がいたことをふと思い出しました。そこで、電子書籍で購入して読み直したのですが、登場人物の名前に驚きました。その名前というのは、スサノオ、猿田彦、ウズメ、ニニギといった名前です。これらは、古事記に登場する神々の名前に由来していたことを今になって知ることができました。

古事記の内容については、普通は学校で習うことはないと思いますが、身近な出来事や漫画等を通じて、学びはいくらでもあると気づきました。大学もそれを取り巻く世界も変化の激しい時代ですが、教育機関で働く職員の一人として、こうした学びは継続していきたいと思います。

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。
本制度を利用して昨年度は4件採択されましたので、ご紹介します。

利他行動の促進・抑制過程 評判への関心に基づく検討

【ナカニシヤ出版】

河村 悠太 京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程修了（2019.3.25）／大阪公立大学大学院現代システム科学研究科准教授

倒れてしまった他人の自転車を起こす，友人の持っている重い荷物を一緒に運ぶ等，助け合いは社会の中で普遍的にみられるふるまいですが，なぜ人々は，自分の資源を使ってまで他人のために振舞うのでしょうか。

本書では，助け合いにつながる要因の1つとして，人々が持っている評判への関心に着目しました。人助けは一般的に他者からの良い評判につながる行動であり，そこから考えると他者からの評価を気にする人ほど人助けを行いやすいように思われます。本書では心理学調査や実験をベースにそのような心理的なプロセスを議論すると同時に，評価を気にすることが逆に人助けを抑制する過程も併せて検討し，評判への関心と利他行動の複雑な関係に迫っています。

助け合いの基礎となる心理的プロセスに関心を持つ方の参考になれば幸いです。

ジョン・デューイと「生活としての芸術」1920年代から30年代の教育哲学と実践

【京都大学学術出版会】

西郷 南海子 京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程修了（2020.3.23）／日本学術振興会特別研究員PD（上智大学）

わたしは小学生のとき、1年間だけイギリスの小学校に通ったことがあります。現地校だったので、もちろん授業にはついていけません。でも美術の授業で絵を描くことで、自分の存在意義を示したり、友達とやりとりをしていました。言葉によらないコミュニケーションでした。

そんな体験が今回の博論につながったのかもしれません。主な舞台は1920年代から30年代のアメリカ。教育・哲学・芸術の専門家たちが連携し合いながら、世界大恐慌に立ち向かい、パンだけでなく、アートの必要性を説きました。それだけでなく実際に、全米規模の「連邦美術政策」として結実させたのです。その中心にいた哲学者ジョン・デューイの思想と行動に焦点を当てながら、みなさんとこの時代を一緒に歩いてみたいと思います。

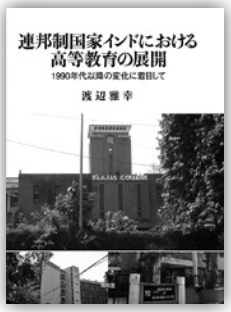
忘却された日韓関係：〈併合〉と〈分断〉の記念日報道

【創元社】

趙 相宇 京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程修了（2021.3.23）／立命館大学産業社会学部国際調査・教育センター特任助教

日韓はなぜ未だに「過去」を巡って衝突するのか。その気持ちの悪さを解消するため、近年では日韓ともに「反日」というマジックワードをつかってその葛藤を焦点化し、なんとなくわかった気にさせるあり方が一般的になりました。しかし、「反日」という前提は果たしてこれまでの日韓の植民地支配を巡る葛藤を紐解く上でどれほど有効なものでしょうか。本書は、その前提に対する疑問から書かれています。

日韓の「過去」を巡る葛藤の「出発点」、「中点」、「終点」をそれぞれに該当する記念日報道から紐解き、そこに立ち現れる「反日」との距離を「自主性＝参加」として整理しました。「悪／善」、「反／親」、「敵／友」という植民地支配をめぐる二項対立を脱構築し、相互への責任のなすりつけから抜け出て「過去」を主体的に議論する「未来」のために本書が少しでも役に立てば冥利に尽きます。



連邦制国家インドにおける高等教育の展開 ―1990年代以降の変化に着目して―

【東信堂】

渡辺 雅幸 京都大学大学院教育学研究科 博士後期課程修了（2019.7.23）／びわこ学院大学教育福祉学部准教授

インドは人口が13億人以上の超大国であることに加え、宗教や言語、民族などの多様性に富んでいることで知られています。そこで、そうした多様性を認めつつ「インド人」としての国民統合を実現するための政治制度として、インドでは「連邦制」を採用してきましたが、インドの連邦制はアメリカなどと異なり、中央にも大きな権限がある点に特徴があります。

そこで本書は、1990年代以降の本格的な市場化やグローバル化などの変化に伴い、高等教育の主要なアクターである機関、教員、学生に関わる連邦政府の施策を総合的に検討することで、連邦制という枠組みのもと、インドの高等教育がどのように展開しているのかを明らかにすることを試みました。

本書が、南アジア地域や高等教育などに関心あるさまざまな人々にとって少しでも参考になれば幸いです。

諸記録

主な出来事（2021.11.1~2022.3.31）

11月3日（水）	**教育実践コラボレーション・センター E.FORUM** **オンラインコース「教育評価の基礎講座」2021** 第6回「学校ぐるみの授業改善の進め方」石井英真准教授
11月3日（水） 11月17日（水）	**教育実践コラボレーション・センター E.FORUM** **オンラインコース「学校教育おけるICT活用の基礎講座」** 第5回「中国の学校教育におけるICTの活用」 南部広孝教授・教育学研究科博士後期課程 張潔麗 第6回「教育におけるデータ利活用：学校現場のための基礎から教育とDXの関係の近未来まで」 久富望助教
11月13日（土）	**教育実践コラボレーション・センター E.FORUM** **オンラインコース「教育評価の実践講座――パフォーマンス評価をどう活用するか」** 【教科別分科会】 「算数・数学科におけるパフォーマンス評価の在り方」 兵庫教育大学教員養成・研修高度化センター　徳島祐彌助教 「理科におけるパフォーマンス課題を生かした単元設計の方策」 愛知県立大学教育福祉学部　大貫守准教授
12月14日（火）	**小中高大連携** **特別授業「命の授業～ダイバーシティと生きる～」** グローバル教育展開オフィス　安藤幸講師 奈良県橿原市立白橿中学校
12月25日（土）	**小中高大連携** **地域課題解決に取り組む高校生サミット　高大連携フォーラムin京都大学** 西岡加名恵教授 人間・環境学研究科棟　大講義室
1月11日（火）	**小中高大連携** **「総合的な探究の時間」における課題研究セミナー** 「課題研究の進め方とその留意点」講演者　服部憲児准教授 福岡県立京都高等学校（福岡県行橋市）　オンライン
1月14日（金）	**グローバル教育展開オフィス** **2021ウェビナーシリーズ** 第3回 Japanese Staffroom - Outsiders Looking in? Towards “East Asia as Method”
1月24日（月） 2月7日（月）14日（月）	**小中高大連携　「地域の生活キャリアデザイン」の授業** グローバル教育展開オフィス　安藤幸講師 奈良県立榛生昇陽高等学校　専攻科介護福祉科
2月16日（水）	**グローバル教育展開オフィス** タンペレ大学教育文化学部（フィンランド）共同開催講演会 "The ethics and politics of educational export: Japan and Finland in a comparative perspective" 教育輸出の倫理的・政治的課題：日本とフィンランドの比較から グローバル教育展開オフィス 高山敬太教授 大妻女子大学文学部 コミュニケーション文化学科　興津妙子教授 タンペレ大学経営学部　Henna Juusola博士研究員 タンペレ大学教育文化学部　Kimmo Kuortti 博士課程在籍研究員
3月13日（日）	**岡野憲一郎教授　最終講義** 「臨床において『他者』と出会う事」 オンライン
3月20日（日）	**「遠隔地から諏訪を学んで～洲羽（すば）らしい仲間たち展～」** グローバル教育展開オフィス　安藤幸講師 創価大学　文学部社会福祉専修西川ハンナ准教授 創価大学　文学部 帆北智子准教授 東京未来大学　こども心理学部髙橋文子准教授 長野シニア大学　学生代表者 諏訪駅前交流テラスすわっチャオ
3月26日（土）	**教育実践コラボレーション・センター E.FORUM** 「第16回 実践交流会」 岩井八郎名誉教授 講演会（日本教育学会近畿地区主催 / E.FORUM 後援） 「ポスト家父長制世界におけるアジアの家族変動と家族意識」 オンライン

入試結果　2022（令和4）年度

教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	44	158	154	46	56
	理系	10	36	34	10	
特色入試		6	23	23	5	5
学士入学（第3年次編入学）		10	14	14	9	9

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。　（　）内の数は外国人留学生で内数

教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	69（12）	68（12）	39（4）	37（4）
		教育実践指導者養成プログラム	5	5	5	3	2
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	20（3）	20（3）	10（2）	10（2）
		臨床実践指導者養成プログラム	4	2	2	2	2

※博士後期課程（研究者養成プログラム）は内部進学者を除いた数。　（　）内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数　2021（令和3）年度

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	64
修士	教育学環専攻	38
博士	課程博士	9
	論文博士	1

教育職員免許状取得状況　2021（令和3）年度

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	1
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	5
特別支援学校教諭1種免許状	0

外部資金受入れ（2021.10.1～2022.3.31）

共同研究

研究題目	委託者	研究担当者
テキスト情報のセンチメント分析による心理・感情の予測システムの開発	株式会社京都テキストラボ	野村　理朗
女性と子どものこころとからだの健康サポートに関する研究	国立大学法人大阪大学 株式会社サイキンソー キユーピー株式会社 JSR株式会社	明和　政子
ガーディアンロボット開発のための心理学的研究	国立研究開発法人 理化学研究所	楠見　孝 齊藤　智 野村　理朗 髙橋　雄介
パフォーマンス課題に取り組む授業のための様々なデジタル・コンテンツ	凸版印刷（株）	西岡　加名恵
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	野村　理朗 久富　望

寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
全人教育研究のため	株式会社テイコク	齋藤　直子
教育学研究科E.FORUM研究活動の促進のため	凸版印刷（株）	西岡　加名恵

学術指導

研究題目	寄附者	研究担当者
多感覚プロセスに関する学術指導	パナソニック株式会社 くらしアプライアンス社	楠見　孝

科学研究費補助金　2022（令和4）年度

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(S)	個別的育児支援手法の創出を導く養育者―乳児の動態とその多様性創発原理の解明	明和　政子
基盤研究(A)	身体的表象から自他分離表象にいたる発達プロセスの解明	明和　政子
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かしたカリキュラム・マネジメントの改善方略の開発	西岡　加名恵
基盤研究(B)	批判的犯罪学の観点をふまえた非行からの離脱過程に関する研究	岡邊　健
基盤研究(B)	日本植民地統治下台湾における教育の「植民地性」再考―共時的・通時的比較分析	駒込　武
基盤研究(B)	実行機能を「実行」する知識の獲得過程と運用機構の解明	齊藤　智
基盤研究(B)	近代日本の政治エリート輩出における「メディア経験」の総合的研究	佐藤　卓己
基盤研究(B)	共感覚比喩と共感覚現象に共通する認知メカニズム：大規模web実験による検討	楠見　孝
基盤研究(B)	領域横断的な万国博覧会史研究を通じた新しい戦後史叙述の可能性	佐野　真由子
基盤研究(B)	自己超越的感情の生起メカニズムに関する心理・生物・情報学的研究	野村　理朗
基盤研究(C)	心理アセスメントにおけるスーパーヴィジョンシステムの構築	髙橋　靖恵
基盤研究(C)	大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容	竹内　里欧
基盤研究(C)	非英語圏トランスナショナル高等教育の展開に関する国際比較研究	杉本　均
基盤研究(C)	ソーシャルワーク専門職教育における「多様性教育」の国際比較研究	安藤　幸
基盤研究(C)	明治期におけるカナダ・メソジスト教会の教育事業－公教育と学校制度の展開への対応―	田中　智子
基盤研究(C)	他者の「受諾」に向けた哲学実践：アメリカ超越主義の教育的意義をめぐる国際対話研究	齋藤　直子
基盤研究(C)	Do East Asian Students Achieve Highly at the Cost of Well-Being? Critical Analysis Utilizing PISA	Rappleye Jeremy
基盤研究(C)	日本の精神分析史の構築―古澤平作の遺品調査を通して―	西　見奈子
基盤研究(C)	近世医療情報の教育メディア史―「不安」に挑む「施印」	VAN STEENPAAL,Niels
基盤研究(C)	「対面型遠隔教育」としてのトランスナショナル高等教育の機能に関する国際比較研究	杉本　均
基盤研究(C)	自閉スペクトラム特性の強みを探る	明地　洋典
基盤研究(C)	都市新中間層家庭の人間形成と教育戦略：　大正・昭和初期の児童文学の分析を中心に	竹内　里欧
基盤研究(C)	日本型学校教育の構造変容に対応する資質・能力ベースのカリキュラムと授業の再構築	石井　英真
基盤研究(C)	教員の思考様式等を考慮した教育政策の立案・実施に関する研究	服部　憲児
基盤研究(C)	STEAM教育を軸としたカリキュラム・マネジメントの推進にむけた教員の力量開発	開沼　太郎
基盤研究(C)	社会情動的コンピテンシーの測定と涵養：特性とスキルの弁別のための教育心理学的研究	髙橋　雄介
基盤研究(C)	公立図書館集会室の理念と現実の確執に関する歴史と現状の分析	川崎　良孝
挑戦的研究(開拓)	カリキュラム空間：生徒の自己調整思考能力を高める革新的なカリキュラム編成	Manalo Emmanuel
挑戦的研究(萌芽)	ビルドゥングスロマンと「女性の生き方」の表象に関する比較文化社会学研究	稲垣　恭子
挑戦的研究(萌芽)	対人相互作用における内受容－外受容感覚の統合とその発達機序の解明	明和　政子
挑戦的研究(萌芽)	ワーキングメモリ・トレーニングの「負の効果」を越えて	齊藤　智
挑戦的研究(萌芽)	「無心」の認知科学	野村　理朗
若手研究	Round Studyの有効性の検証と評価シートの開発・効果検討	黒田　真由美
若手研究	自閉症の選好性過剰説の認知科学的検討	明地　洋典
若手研究	地理的空間・場所に基づく世界市民的教育の理論と実践に関する研究	広瀬　悠三
若手研究	日本における医学知識の生産・流通と映画の役割	藤本　大士
若手研究	人間の養育欲求と認知：社会神経学アプローチからの解明	高松　礼奈
若手研究	意味的類似性効果に基づく意味的保持メカニズムの解明	石黒　翔
若手研究	童話『ピノキオ』をめぐる差別図書問題と図書館の対応に関する総合的研究	福井　佑介
若手研究	オランダのオルタナティブスクールにおける教師の指導性	奥村　好美
研究活動スタート支援	海外に長期滞在する日本人家庭の心理社会的適応	安藤　幸
研究活動スタート支援	教育モデルの国際移動メカニズムの検証：　ＥＤＵ－Ｐｏｒｔを一例として	高山　敬太
国際共同研究強化(A)	Towards Diversification of Global Policies to Enhance Student Well-Being and Non-Cognitive Outcomes: Bridging Education and Cultural Psychology from East Asia	Rappleye Jeremy
国際共同研究強化(B)	他なるものとの共存に向けた政治教育：日本先導によるアメリカ実践哲学の国際対話研究	齋藤　直子
国際共同研究強化(B)	認知リソース概念の誤謬に挑む国際共同研究	齊藤　智

教員寄贈図書　2021（令和3）年度

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
岡邊健	犯罪・非行からの離脱	ちとせプレス	2021
久富望	グローバル化、デジタル化で教育、社会は変わる	東信堂	2021
髙橋靖恵	ライフステージを臨床的に理解する心理アセスメント	金子書房	2021
辻本雅史	江戸の学びと思想家たち	岩波書店	2021
南部広孝	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究（最終報告書）	南部広孝	2021
南部広孝	検証日本の教育改革：激動の2010年代を振り返る	学事出版	2021
南部広孝	日中韓の教育事情に関する国際比較調査	科学技術振興機構中国総合研究・さくらサイエンスセンター	2021
西岡加名恵	学力テスト改革を読み解く!「確かな学力」を保障するパフォーマンス評価	明治図書出版	2021
西岡加名恵	生徒が主人公になる高校英語の授業：パフォーマンス評価で,学び合う生徒たちを育てる	日本標準	2021
西平直	井筒俊彦と二重の見：東洋哲学序説	未来哲学研究所	2021
西平直	養生の思想	春秋社	2021
福井佑介	図書館の社会的責任と中立性：戦後社会の中の図書館界と「図書館の自由に関する宣言」	松籟社	2022
山名淳	伝達と創造：「原爆の絵」プロジェクトを通して想起と想像を考える	山名淳	2022

受入期間：2021/4/1 ～ 2022/3/31　寄贈者氏名順（敬称略）
教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳・監修・監訳のみ掲載です。
今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようよろしくお願いいたします。

人事異動（2021.11.1～2022.4.30）

【令和３年12月1日】

	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	採用

【令和４年３月1日】

	事務補佐員（教育・人間科学）	採用

【令和４年３月10日】

	技術補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	退職

【令和４年３月16日】

	事務補佐員（総務掛）	採用
	事務補佐員（教育認知心理学）	採用

【令和４年３月31日】

鈴木　晶子	教授（教育・人間科学）	定年退職
西平　直	教授（教育・人間科学）	定年退職
岡野　憲一郎	教授（附属臨床教育実践研究センター）	定年退職
三野　和惠	助教（教育・人間科学）	任期満了
野田　実希	助教（臨床心理学）	任期満了
松永　倫子	特定助教（教育方法学）	任期満了
石黒　翔	研究員・教務補佐員（教育認知心理学）	退職
波多野　文	研究員（教育認知心理学）	退職
	事務補佐員（現代教育基礎学系）	任期満了
	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	任期満了
	事務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	任期満了
	事務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	任期満了
	派遣職員（総務掛）	任期満了
	派遣職員（総務掛）	任期満了

【令和４年４月1日】

楠見　孝	教授　研究科長・学部長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
	教育学系長（任期令和4.4.1-令和6.3.31）	
佐藤　卓己	教授　副研究科長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
南部　広孝	教授　副研究科長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
田中　康裕	教授　附属臨床教育実践研究センター長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
駒込　武	教授　現代教育基礎学系長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
田中　康裕	教授　教育心理学系長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
佐藤　卓己	教授　相関教育システム論系長（任期令和4.4.1-令和5.3.31）	
松下　姫歌	教授（附属臨床教育実践研究センター）	昇任
田中　智子	教授（教育・人間科学）	昇任
福井　佑介	准教授（教育社会学）	昇任
奥村　好美	准教授（教育・人間科学）	採用
石黒　翔	助教（教育認知心理学）	採用
長谷　雄太	特定助教（臨床心理学）	採用
宇野　純子	掛長（教務掛）	
	桂地区（工学研究科）教務課課長補佐（大学院・留学生担当）へ昇任・配置換	
中村　敦朝	掛長（教務掛）	
	桂地区（工学研究科）教務課掛長（Aクラスター事務区教務掛）より配置換	
大江　將貴	研究員（教育社会学）	採用
	事務補佐員（総務掛）	採用
	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	採用
	教務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用

【令和４年４月16日】

	事務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用

【令和４年４月30日】

	技術補佐員（教育・人間科学）	任期満了

諸報

新任教員・事務職員紹介

奥村　好美　准教授
所属：教育・人間科学講座
専門：教育方法学

日本・オランダをフィールドに、教育評価やカリキュラムのあり方について研究してきました。どうぞよろしくお願いいたします。

石黒　翔　助教
所属：教育認知心理学講座
専門：ワーキングメモリ

講座と研究科にとってプラスになるように貢献できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

長谷　雄太　特定助教
所属：臨床心理学講座
専門：臨床心理学・心理療法

心理臨床実践におけるネガティブな事象に関心を持ち、研究を進めています。大きな恩のある本研究科に貢献できるよう励みますので、どうぞよろしくお願いいたします。

中村　敦朝　教務掛長

4月から教務掛長として着任しました。新しい環境での仕事は大変でもありますが、楽しみでもあります。どうぞよろしくお願いします。

名誉教授 訃報

本山　幸彦　京都大学名誉教授

1924年大阪府に出生。京都帝国大学文学部哲学科卒業後、人文科学研究所助手を経て1958年教育学部に異動、教育史講座を担当。1988年定年退官・名誉教授。関西大学勤務の後、宮崎市に居住。2022年没、享年97歳。『明治思想の形成』(福村出版 1969年)、『明治国家の教育思想』(思文閣出版 1998年)など近世・近代の教育思想の研究の傍ら、当時主流であった教育制度・政策史に対し、政治と教育世論とのせめぎあいに着目した近代教育史像を共同研究として切り拓いた。『明治教育世論の研究』(福村出版 1972年)、『帝国議会と教育政策』(思文閣出版 1981年)など一連の共編著はその成果である。正義感あふれるお人柄を慕う内外の後進も多く、本山ゼミに学んだ欧米人研究者の翻訳によりProliferating Talent, (editede by J.S.A. Elisonas and R. Rubinger, University of Hawai 'i Press, 1997)が刊行されている。謹んでご冥福をお祈りいたします。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

竹内　和子　　宗教法人曹洞宗成興寺代表役員　小倉　道紀

※50音順　※2022年4月末現在

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いします。

基金の使途：

項　目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣　など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催　など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動　など

詳細については以下をご覧ください。
http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html

編集後記

パンデミックの影響は続いています。とはいえ京大では授業の多くが対面形式に戻り、キャンパスの活気は戻ってきました。入学後最初の学期が全面オンライン授業となった学年は3回生に進級し、各系のゼミで学び始めています。やはり対面が良い。でもオンラインの利点も多い。彼らの声の最大公約数はこんなところだと思われます。両者のより良い組み合わせ方が、大学教育において、そして初等中等教育においても、今後ますます問われていくことになるのでしょう。(岡邊健)

表紙によせて

令和３年３月に策定された「科学技術・イノベーション基本計画」では、現代社会の複雑な諸課題に向き合い、解決するための「総合知」の創出が目指されています。総合知では、多様な知が集い、新たな価値を創出する知の活力を生むことが求められていますが、まさに教育学研究科・学部の教育・研究活動は、次世代人類の幸福を支える総合知そのものといえるでしょう。

その最先端の研究動向を皆さまにいち早くお届けするために、教育学研究科公式HPを７月に大幅リニューアルいたします。ぜひお目通しください。(明和政子)

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　明和　政子　教授(教育・人間科学講座)
委員　岡邊　健　教授(教育社会学講座)
委員　髙橋　雄介　准教授(教育認知心理学講座)

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛　　ホームページ　http://www.educ.kyoto-u.ac.jp

125th ANNIVERSARY KYOTO UNIVERSITY
2022年、京都大学は
創立125周年を迎えました。

ガイドドッグペーパー
当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています